二人の遺族は、ただ茫然としていた。
威儀を繕うような素振りも見せなかった。
（この二人が、「軍神」という言葉に、一番、面食らっているのかもしれない）
飾り気のない、昔ながらの謙譲に溢れていた。
その後、十日ほど鹿児島で取材をした。
予想通り、平凡で穏健な青年だった。
東京に帰って、学芸部長とともに海軍報道部を訪ねた。
連載の趣旨、内容を説明した。
「彼が、平凡きわまる生い立ちで、平凡な人柄だった、という事を書きたいのです。その戦功は、誰でも識っていることなので、その平凡さを書かせていただきたい」
学芸部長は、少しく緊張しているようだった。
「それこそ、当方の望むところです。秀才で豪傑なんて書かれると、誰も真似しませんからな」
担当の中佐は、云った。
日露戦争の頃の軍人だったら、こんな事は云わないだろうな。まるで商売人じゃあないか。
少し落胆したが、連載は決まった。
「これは、これまでの戯作とは違うのだ」
そういう意気で、獅子は本名の岩田豊雄で新連載を執筆することにした。
昭和十七年七月一日から朝日新聞で、『海軍』の連載がはじまった。

『海軍』は、大戦中、一番のベストセラーとなり、松竹により制作された映画も、大当たりをとった。

∴

七月に入って、東京は連日、気温は三十度を越していた。
彼の人の体調を気遣い、東條英機首相、松平恒雄宮内大臣が、何度も日光への行幸をお願いしたが、お聞き届けにならなかった。
「かかる時局に、涼しい処に行く気がせぬ」
そう仰せになって、陸軍、海軍など、しかるべき処に行くと云う。
十三日には、霞ヶ浦の十一連合航空隊に行幸した。
まず、土浦で予科練の体育、整備作業を検分した後、霞ヶ浦で計器操作地上練習、飛行作業、爆撃地上練習を天覧した。
天候の都合により、空戦訓練は出来なかった。
今回の行幸は、純粋に彼の人の発意によるものであったため、霞ヶ浦の航空隊員の感激は、深く、大きいものだった。
土浦では、数週間前、ジフテリアが発生していたので、行幸するかどうかで、議論があったが、結局、無事に終了し、すべてを調整した城英一郎侍従武官は、肩の荷を下ろした。
日光田母沢御用邸行幸啓は、十六日からに決定した。
二十一日には、宇都宮陸軍飛行場に行幸し、挺身隊の演習

を見学した。
その日、杉山元（はじめ）参謀総長から、上奏があった。
ベルリンの大島浩大使から電報で、リッベントロップ外務大臣が、日本の対ソ参戦を申し入れてきたというのである。
「総長は、どう考えるか」
彼の人の御下問に、杉山は珍しく明快に答えた。
独ソの戦局は、変化していくでしょうが、ドイツ軍はコーカサス方面に力を注いでいるようでございます。ソビエトは、最悪の場合でも、シベリアで頑強に抵抗すると存じます。然る場合、わが国が東方から攻撃しても、戦場からは遠いのでその効果は期待できません。従って慎重に対処するべきかと存じます。
「従来の方針通りということか」
ソビエトが挑戦して来ないかぎり、従来通りに処置したい、と杉山は云った。
「ドイツとイタリアの、インド洋方面への攻勢の可能性をどう判断しているか」
トブルクの失陥により、英軍がインド洋まで退くのではないか、と彼の人は考えているようだった。
「ドイツ軍の進撃が、中近東とインドに大きな脅威を構成しつつあるのは、明らかでございます。その点につきましては、海軍による作戦強化が望ましいかと存じます」
一息に述べた後に、「インドに対する地上作戦は、慎重に検討したい」と、総長はつけ加えた。

「インドへの姿勢はそれでよいと思う。その方針で研究せよ」
彼の人は命じた。
七月二十九日、彼の人は、明治天皇三十年式年祭のため、東京に還った。
八月一日、再び田母沢に戻って避暑生活が再開された。
前日の驟雨のおかげで朝から天気が良かった。
秋が到来したような陽気で、日の光も黄色にみえた。
朝、いくつかの上奏の後、八月五日に竣工式を行う予定の戦艦武蔵のための勅諭に彼の人は署名した。
昼すぎ、彼の人は皇后と、四人の内親王を連れて、小倉山に赴いた。
皇后と内親王が池で釣りをしている間、彼の人は粘菌を採集していた。
昭和四年、南紀行幸に際して、彼の人は、田辺湾神島沖、戦艦長門の艦上で、南方熊楠（みなかたくまぐす）の御進講を受けた。周囲の者に配慮する彼の人としては珍しく、五分間の延長を所望した。この時、彼の人は熊楠から、粘菌の標本を譲り受けたのである。
彼の人は、いくつか新種の粘菌を発見し、服部広太郎学習院教授の名義で『那須産変形菌図説』を上梓している。

∴